日本村落研究学会　研究通信

No.174　1993.12.14

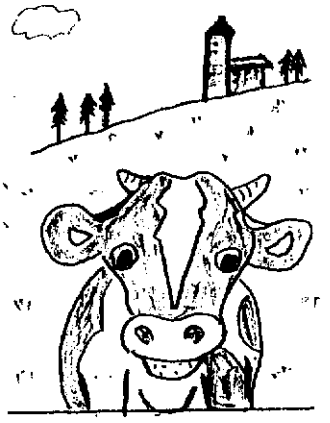
《事務局》　農業総合研究所　Tel:03-3910-3946
相川・石原・市田・須田　FAX:03-3940-0232
〒114　東京都北区西ヶ原 2-2-1
郵便振替口座　東京 8-716934（1994年 4月まで）

１．　女満別大会印象記
２．　1993年度第５回理事会
　　理事改選方法について、など
３．　1993年度日本村落研究学会総会
　　次期新理事の選出
　　村落研究学会機関誌・編集委員会改革の骨組み
　　1993年度決算、1994年度予算、など
４．　1994年度第１回理事会
５．　第２回理事会
　　各種委員会のメンバー構成
　　『村落社会研究年報 第30号』の編集方針
　　「研究通信」の衣替えについて、など
６．　第１回『村落社会研究ジャーナル』編集委員会
　　『村落社会研究ジャーナル』の編集方針、など
７．　国際交流委員会からのお知らせ
８．　会員異動
９．　地区研究会及び次期大会開催地のお知らせ

１．女満別大会印象記

村研変革期の大会に参加して

一橋大学　清水みゆき



村研が学会となって第１回目の大会でもある第41回大会は、北海道の女満別で開催された。昨年は天草で今年は女満別と、いかにも村研らしい地域での開催とはいえ、学生にとってはこの大会に参加するためにどれだけの覚悟（金銭的な）が必要であろうか、と思い至る。まあこれだけさまざまな地域で開催されるということは、参加者がいつかは非常に低コスト

で参加できるという可能性がより多くの人に残されるし、なかなか一人では決心しかねる場所へも学会参加に便乗することで、念願の地へ行くことが可能となる、など色々なメリットを思いつくうちに、飛行機は羽田からわずか１時間40分で女満別空港に着いてしまった。自身の通勤時間より早く東京とをむすんでしまう女満別は、航空券の値段の問題さえなければ、決して通勤圏ではないとはいえない、とさえ思った。

さて報告についてだが、第一日目の自由報告は、全体として地域・村落構造の変質と農業との関わりについての現状分析が大半を占めていた。そうした中で韓国やタイ、イギリス等について歴史的な分析も踏まえた家族構造の変遷の報告もあったことは、一国内での農業問題や社会問題の視野を広げ、また国際的な社会・経済環境の問題認識の機会をも与えてくれるものであった。

第二日目は、通常（どおり）共通課題に基づく報告と、それを踏まえた全体討論となるが、今年は村研の組織変革という節目でもあり、共通課題は「村研40年---これからの課題」というテーマが設定された（誰が）。これは、これまでの村研の40年の研究蓄積を踏まえ、組織変革という節目を迎えた今日の村研の課題を、経済学・経済史学、社会学、農業経済学といった立場からの報告によって討論しようという目的によるものであろう。時間の関係上、十分な討論がなされたとはいえないが、家族農業経営における女性の位置という切り口からの家族経営についての庄司報告に議論が集中した点は、現在の経済・社会問題の所在と、今後の村研の課題設定の在り方とを考えさせるものであった。自分自身の勝手な解釈でいえば、農家家族の従来の研究動向を検討したものとしての相川報告や、農政との関わりを重点とした現在の農民の動向についての徳野報告も、庄司報告における問題の所在の背景を理解するものとして興味深かった。そういう意味では今大会から得るものは大きかったと思う。

しかし、異例ともいえる２日間にわたる総会と、昨年からの組織変革の問題との関係で幾つかの疑問点が残った。昨年の天草大会で「当分は大会テーマを設けず、自由報告を重視する」ことが決定しているが、今年の大会でそれは実現したと言えるのか。確かに自由報告は特別報告も含めて11本と本数は多かったが、討論時間などは明らかに短かったのではないか。また「自主的なグループ研究を奨励し、成果のあるものについてはそこでのテーマを全体のテーマとする」ことも決められたが、そうしたグループによる成果が出てくるまでは、ずっと今年のように今後の課題を模索するのか。

それと年報のテーマとの関係はどうなのか。昨年「次年度の年報のゆるやかなテーマを、大会時までに設定する」とした通り、今年は「これからの課題」というゆるやかなテーマが設定された。しかしそれは年報のテーマであって、大会のテーマだと決められていたのだったか。年報は「グループ研究の成果を重視し、それを年報として出すこともあり得る」とした通り、大会の共通課題となるまでにグループ研究の成果があがった場合は大会、年報双方のテーマが同一になることを示唆している。それは理解できるが、そうしたグループ研究の成果の擡頭までは、編集委員会の設定した年報のテーマが大会の共通テーマなのか。私は研究委員会が大会のテーマを設定しているのだとばかり思っていたのである（もっとも編集委員会と研究委員会が全く独立しているなどとは思っていないが）。また大会そのものが自由報告を重視するとしながらも、そのうちの何本が年報に掲載されるのか。なんとも「年報のための村研」という感が拭えないのである。